マイ・ＢＯＳＳ～テロリストの仕返し～

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マイ・ＢＯＳＳ～テロリストの仕返し～

【Ｎコード】
Ｎ２６５７Ｄ

【作者名】
のりまき

【あらすじ】
特別短篇小説。聖なる夜に悲劇の予感が……！あまり深く考えずに読んでほしいです（笑）

俺は、ボスが大好きだった。
俺をここまで育ててくれたボスに感謝していた。
ああ、俺にはわからないさ、ボスの気持ちなんて。ボスの代わりに、俺が仕返しをしてやろうと思ったのに、ボスは笑いながら俺を蹴り飛ばした。俺なんか、必要ねぇんだってよ。
俺はボスが嫌いになった。埃まみれのボスが大嫌いになった。
だが、それ以上に嫌いなのが、雪夜に眩しい光を放つ、このデパートだ。けたたましいアナウンスで通り人を連れ込もうとしている、このデパートだ。
このデパートがボスを埃まみれにしたんだ。
ボスに追いやられた俺には帰る場所がない。だからせめて、ボスのために、俺の命を犠牲にしてやろうと思う。
憎きデパートの自動ドアを潜り、俺はコートの上から胸を押さえてエスカレーターへと足を運んだ。
デパート中に響く不愉快な音楽が俺の耳をくすぐった。そういや、今日はクリスマスだったな。ボスへのプレゼントが“この仕返し”とは、最初で最後にしてはなかなかな贈り物だと思う。
エスカレーターで上がる途中、カップルとすれ違った。女に興味がない、と言っては嘘になるが、なぜ、あんな風に寄り添い合えるのかが、俺には理解不能だ。こんな日ともなると、二人の世界が広がりすぎて、世界の外にいる俺は、窮屈になり、無性に腹が立つ。
カップルを睨み付けながらエスカレーターを上がった俺は、“仕返し”をする絶好の場所を探した。俺の身をこのデパートと共に砕けさせられる場所。それでいて、多くの買い物客までも巻き込める場所。
ふと胸を押さえ付ける俺の前に、ボンボンの着いた毛糸の帽子を被っている少女が現われた。

「おじしゃん、ゆーちゃんのママ知らない？」
迷子だ――咄嗟にそう思った。俺を見上げるその瞳には、全く涙を浮かべていなかった。
「ごめんな、嬢ちゃん」俺がそう言うだけで、少女は鼻を啜り始めた。
「――よし！　じゃあ、おじさんと、ママを探そう！」
「うん！」満面の笑みだ。
十分に暖房の効いたこの空間でも、少女は暖かそうな手袋をはめていて、その可愛らしい手を俺の二本指につかませた。
少女はママの服装を教えてくれたが、俺は探す振りをしていた。どうせ、そのママが心配になって、アナウンスで呼び出しをするように請うだろう。そしたら、手放せばいい。無駄な時間を費やしたくなかった。このむさ苦しい場への“仕返し”を実行できるところを探した。
ふん、今となっては、死神（かみ）は俺の味方だ。少女とママは再開した。オレンジのコートを着ていたママは、スレンダーでまだまだ若かった。長く茶色掛かった髪を揺らし、軽く会釈をする。
「娘さんの手を離さないように。今夜はクリスマスだ。デパートの明かりより外のイルミネーションを堪能するのも悪くないと思いますよ」
早くこのデパートから立ち去った方が身のためだ、というニュアンスを込めたが、伝わったかはわからない。微笑したママを見るかぎり、程度が弱すぎたようだ。俺は少女のバイバイを聞きながら、その場を後にした。
あれから十数分。
俺はやっと捜し求めていた場所を見つけた。デパートの最上階だ。そこにはベンチがあり、ガラス張りの天井からは、雪の降る空が見渡せた。中央には、巨大なクリスマスツリーが置いてあり、子供たちに囲まれている。嬉しいことに、それを見守っている親御さんもいた。二人だけの世界を広げ続けるカップルもいた。

ここにいる奴らが、悲劇のクリスマスを飾ることになるんだな。俺は胸を押さえて薄ら笑いを浮かべた。残念ながら、俺は悲劇の対象外だからな。失うものがないわけじゃないかも知れないが、“仕返し”が完遂する。ただその達成感と共に俺の世は朽ちる。それの何処に悲劇が存在するというんだ？

ポケットの中にはスイッチがある。俺はそれを硬く握り締め、ツリーのそばまで歩み寄った。

「さあ、寄っておいで。今からびっくりショーを行おう！」

両手を広げる俺のそばに子供たちは寄ってきた。その表情は期待に満ちている。ハッとして、親御さんたちを見るが、その笑顔も幸せに満ち満ちていた。自分達の世界を解放したカップルたちも寄って来る。

何でだろうか。凄く、辛くなった。確かに、このデパートに“仕返し”をしてやろうと思っていた。ボスの代わりに“仕返し”をして、俺の死に様までも贈ってやろうと思っていた。だが、ここにいる奴らは、俺やボスに関係なく、幸せそうだ。

それを思った瞬間、俺の二本指に、ほんの少しの間捕まっていたあの少女の温もりが蘇ってきた。今日出会って、さらに、あんなに短い時間だったのに、あの少女を愛しく思う。あの少女は、ママと一緒にここから出ていっただろうか。

目の前で期待を膨らませている子供たちとカップルもまた、あの少女のように愛しく思えた。

今俺は、この目の前に広がる幸せたちを薙ぎ払おうとしてるんだ。そう思うと何処かやるせない虚しさに駆られ、目頭が熱くなった。悲劇の一番の対象者は、俺なのかもしれない――。

俺の眼から一筋の涙が流れようかといった時だった。一人の店員を俺の眼に捕らえた。悪の根源だった。ボスを埃まみれにした張本人だ。

なんで。なんで、ボスと親友だったお前は、ボスを裏切ったんだ。約束したんじゃなかったのかよ。ボスだって楽しみにしてたんだぞ。

なんでなんだよ。なんで“じゃがりこ”を仕入れなかったんだよ！
そのせいでボスは埃まみれになったんだ。“ポテトチップス”に心変わりしてしまったんだ！
期待を寄せる奴らの目の前で、俺はポケットに手を突っ込んだ。もうこいつらの幸せなんかどうでもよくなっていた。このスイッチで全てが終わる。
――カチッ。
うっすらと笑みを零す俺の視線の先のエスカレーター。そこから少女とそのママが現われてきた。やっぱり、あの言葉は通じなかったのか。
時既に遅し、と言ったところか。デパート全体を揺るがし、俺の背中を貫く衝撃。眩しさを超えた暗闇。拍手に似た耳鳴り。歓喜の声……ん、歓喜の声？
俺は生きていた。目を開けるとそこには、悶え苦しむ子供やカップルの姿が、ない。歓喜に包まれ、拍手喝采だ。しかし、その目線は、俺の遥か頭上に向けられていた。
俺の背中から伸びる棒。その先に括り付けられている布には、この日に相応しい言葉が飾られていた。
「メリークリスマス――」あの少女が目の前に現われていた。
「サンタのおじしゃん」
思えば、俺はバイト先の格好のままだったんだ。
途端に携帯電話が鳴った。ボスからだ。
メールの内容を見たら、ばかばかしくて、思わず笑みを零してしまった。
俺は、ボスが大嫌いだ。

【完】

（後書き）

特にこれといったこともなく、久々の一人称で綴らせていただきました。しかも、携帯で（笑）まあ、もうすぐクリスマス、と言うわけで書きましたが、当初はクリスマスでなく、誕生日を予定していました、はい。そうですね、大した問題ではないです……。最後に、どなたか、“きよしこの夜”を歌ってください（ぇ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2657d/

マイ・ＢＯＳＳ～テロリストの仕返し～

2010年10月8日15時09分発行